

# 文化の伝播

井 本 英 一

齐明天皇3年(657)7月3日、トハラ国の男2人、女4人が筑紫に漂着した。彼らは最初、奄美大島に漂着したと語った。朝廷では<sup>はゆま</sup>馱馬を乗り継いで飛鳥に出頭するよう命じた。7月15日、飛鳥寺の西に須弥山を象ったジググラト(ピラミッド)をつくり、孟蘭盆会を修した。夕方、法会に参列したトハラ国人を供宴に招いた。彼らトハラ国人は、ある記録では<sup>ダラ</sup>堕羅人と呼ばれている。

齐明天皇6年(660)7月16日、トハラ国人<sup>ケンヅ ハシダチア</sup>乾豆波斯達阿は、故国へ帰りたいので、帰還の船を用意して欲しいと申し出た。そのとき「また日本に戻ってきてお仕えしたいので、妻を人質としてとどめ、その証しとします」といい残し、数十人と共に海路を西に取り帰っていった。

天武天皇4年(675)正月1日、大学寮、陰陽寮、外薬寮の役人のほか、舍衛の女、堕羅の女、百濟王(百濟は660年に滅亡)善光、新羅の伎芸者らが屠蘇<sup>びやくさん</sup>や白散その他珍しいものを献上した。

齐明天皇3年と6年のトハラ国に関しては靺鞨羅の文字が当てられる。トハラ国には別に吐火羅の文字を当てた個処がある。孝徳天皇白雉5年(654)

---

キーワード：飛鳥時代の渡来人、新年と打城、契約の箱と御輿、ソロモンの神殿と幕屋、遠山の霜月祭り

4月、吐火羅国の男2人、女2人と舍衛の女1人が風に流されて日向に漂着した。

齊明天皇5年(659)3月、吐火羅の人が妻の舍衛の婦人と共にやってきた。

以上、『日本書紀』からトハラ国人とその一行に関する5項目を挙げた。これらのトハラ国人は奄美や日向のような南九州に漂着しているのが注目される。彼らは朝鮮半島から出航したのではなく、中国大陸を出航し、東シナ海を漂流して、奄美大島に漂着したり日向に漂着したりしたのであろう。あるいは彼らは、朝鮮半島のどこかから北部九州を目指したが、潮流のため関門海峡を通り抜けて、日向に漂着したのかも知れない。両方とも、中国人の同行者がいたと考えられる。日本がわの役人は、白雉5年の場合、これらの人物が吐火羅国人と舍衛の女であることを漢字で了解しているからである。あるいは、これら5人の漂着者のうち少なくとも1人は、中国に永く在留し、中国語の知識をもっていたのかも知れない。齊明天皇3年の漂着者は、觀毗羅国と称した。これも同行の中国人がいたのかも知れないし、トハラ国人の一行の中に中国語に通じた者がいたとも考えられる。日本に渡来したある時点で、日本の役人によってその名前が記録されたとは考えられない。

吐火羅も觀毗羅も中国語中古音ではト・ファ・ラで、トハラを写したものである。トハラは現在のアフガニスタンからウズベキスタンにかけて存在したトハラ国を指した。7世紀にはペルシア語が話されていた。乾豆はケン・ドグで、ペルシア語ヘンドウグ（インド人）を表わした。波斯はバル・シグで、ペルシア語パールシーグ（ペルシア人）を表わした。パールシーグという語は、インドのムンバイ（ボンベイ）にいるゾロアスター教徒、パールシー族の中に受け継がれている。パールシー族は9-10世紀にかけ、イラン本土からイスラム教徒の迫害を避けてムンバイに移住したペルシア人である。近世ペルシア語では、パールシーはアラビア語化してファールシーになった。ファールシーには、ペルシア語とペルシア人の2つの意味がある。乾豆波斯とはインド・ペルシア人のことである。インド・ペルシアとは現在のパキスタン・アフガニスタン地域を指す。この地域はアケメネス帝国の東端

であった。パキスタンに当る地域は、本体のインドと同じ言語、文化を共有していたが、ペルシア文化の影響下に入った。本体のインドではインド人のことはシンドゥーグ（身毒、天竺）といったが、ペルシア語ではヒンドゥーグ、ヘンドゥーグといった。アレクサンダー大王の東征も、アケメネス朝ペルシアの東端までであったので、ヘレニズムはアフガニスタン・パキスタンまで達し、あとは中央アジアを通過して東漸した。バルティア朝時代もササン朝時代も事情は同じであった。ササン朝が滅亡してこの地域はイスラム化するが、インド本体はヒンドゥー（この呼び名自体ペルシア語ふうである）教のままであった。イランではイスラム正統派であるスンニー派からの分派活動が興り、シーア派が主体になるが、イラン文化圏にあったアフガニスタン・パキスタンの多くの地域は征服者アッバースの正統派イスラムであるスンニー圏のまま残った。

齊明天皇3年筑紫に漂着したトハラ国乾豆波斯達阿は、インド・ペルシア人達阿のことである。達阿は以前にもたびたび解説したように、ペルシア語ダーラーをガル・アで写したものである。ダーラーは人名で、ダリウス大王のダリウスにあたる近世ペルシア語である。とはいっても、ダーラーは王室の一員であるとは限らないが身分の高い人物であったようである。『日本書紀』によると、達阿は一行の代表者の観があり、この一行を墮羅人とも呼んだことから、ますますその感を強くする。天武天皇4年正月1日参内した墮羅女はこの一行の女の一人とも、達阿の妻あるいは娘とも取れる。達阿は齊明天皇6年7月16日、妻を人質にして一時的に本国に帰っていった。舍衛女と共に元旦に参内できたからには、相当の高い地位の人物であった可能性がある。舍衛は波斯<sup>ハシノク</sup>匿王が住んでいたコーサラ国の舍衛城とは関係ない。7世紀には舍衛城は荒廃していた。この舍衛はイランから中央アジアにかけてある地名である。ササン朝ペルシアは、642年のニハーヴェンドの決戦で敗れ、メソポタミアにある首都クテシフォンとイラン高原西半分がアラブの手中に陥ったため事実上滅亡し、ヤズドギルド3世は東方へ逃亡したがメルヴ（現トルクメン共和国）で水車小屋番人に暗殺された。ダーラー一行は、そのと

き長安に避難した遺民であったかも知れない。彼らは長安のペルシア人共同体の中で成長し、東シナ海を渡ってまず奄美大島に漂着したと考えられる。

朝廷では駅馬で飛鳥に召し、孟蘭盆会に呼び、夕方には供宴に招いた。長安に難を避けたインド・ペルシア人は、なかんずくペルシア名をもつペルシア人は仏教徒ではなく、<sup>ゾロアスター</sup>拜火教徒であった。拜火教徒を仏教徒の祖先祭に招き、飲食を供するのは不思議であるが、孟蘭盆は本来は仏教の行事ではなかったので何ら不思議ではない。イラン起源と考えられるからである。

竺法護訳とされる『孟蘭盆経』によると、神通第一といわれた仏弟子の目連は亡くなった母親が餓鬼地獄に堕ちて逆さ吊りにされ苦しんでいるのを発見した。釈迦に相談したところ、7月15日に僧たちが総懺悔をし、飲食を供養すれば母は救われるといわれ、その通り布施をしたところ母親は救われた。孟蘭盆会はこれにもとづいた法要とされる。しかし、この経自体、梵語原典もなくチベット語訳もないため、中国で選出された偽経であるとされる。玄奘の下で訳経に従事した玄奘の<sup>げんのう</sup>『一切経音義』13に、孟蘭盆の梵語は逆さ吊りを意味するウツラムパナであるとある。玄奘が考えたウツラムパナは梵語語彙には存在せず、ヨーロッパやインドで出版された辞書には採用されていない。日本で出版された『梵和辞典』や『仏教辞典』はこの語を採用している。日本では何の疑問もなく伝承されたことばである。

古代ペルシア語では、天則に従って生きる（正信の）生者も死者もアルターワンと呼ばれた。ところで「正信の生者や死者たちの」という複数属格はアルターワナームであった。中世、近世ペルシア語ではアルターワンないしアルターヴァーンとなった。ペルシア語のアルタという音は、東方ペルシア語の方言ではウラと発音された。ペルシア語で橋のことをプルというが、プルの古い形はパルタであった。パルタは川や瀬あるいは川を渡ることを意味した。英国のオクスフォードを牛津と表記したが、フォード（浅瀬）はペルシア語パルタと同系である。イラクのメソポタミアを流れるユーフラテス川はギリシア語ふうの名前になっているが、語源的にはギリシア語でもバビロニア語でもなく古代ペルシア語で渡りやすい川を意味した。現在はフォラ

ート川というが、これもアラビア語ではなく、古代ペルシア語に由来する。因みにティグリス川も古代ペルシア語のティグラー(矢)に由来する名前で、ギリシア語や英語の虎を表わす語と同系である。ゆったり流れるユーフラテス川に較べ、こちらは急流である。現在はアラビア語ふうにダジュラ川というが、この語も古代ペルシア語に由来する。

東イラン（現在のアフガニスタンを含む）の方言では、アルターワン／アルダーヴァーンはウラーヴァーン／ウラーヴォンとなった。孟蘭盆は7世紀の長安の音ではウォ・ラン・ブオンに近いものであったと思われる。玄奘は梵語に精通していたので、これをウツランバナと逆製したのであろう。彼がペルシア語に通じていたなら、ウラーヴォンを写したのものとしたであろう。その意味は、「生者であれ死者であれ、天則に従って生きる者たちの」祭りである。つまり生き霊と死に霊の祭りであった。乾豆波斯達阿は長安で仏教徒になったとは考えられない。ましてや彼自身あるいは彼の家族がアフガニスタンで仏教に帰依していたとは考えられない。長安にはペルシア人やシリア人だけが出入りする波斯寺や大秦寺に類するものがあつたが、そこは仏教徒の寺ではなかつた。乾豆波斯出身の達阿はペルシア人で景教徒のシリア人ではなかつた。

達阿は前述したように近世ペルシア語のダーラーを写したものである。古代ペルシア以来のイランの国教ゾロアスター教の聖典である『アヴェスタ』は、古代イラン語の1つであるアヴェスタ語で書かれている。アヴェスタ語を話す者はゾロアスター教徒とすべきで、アヴェスタ語／ペルシア語の人名を名乗るのは当然のことであつた。この教団の宗教術語はもちろんアヴェスタ語である。ゾロアスター教徒はペルシア語やパルティア語の人名を名乗る者が多く伝えられている。ペルシア語を話す教徒の間では、1部の術語はアヴェスタ語ではなく、それに相当するペルシア語でいい換えられた。孟蘭盆の語源になつたアルターワンは、アヴェスタ語ではアシャーワンであつた。アシャーワンは孟蘭盆には転訛しない。

現在は中国西安市碑林で公開され、拓本も入手できる大秦景教中国流行碑

(京都大学文学部と高野山麓橋本市にゴードン夫人が寄贈したコピーがある)は、唐徳宗建中2年(781)に大秦寺に建てられた。建立者はバルフ(北部アフガニスタン)からきた伊斯(イシーク、イエス信者、キリスト教徒)であった。碑文によると、唐太宗貞観9年(635)阿羅本が来唐して景教を伝えたとある。太宗は波斯寺と呼ばれていた寺にその一行を入れ、以後この寺を大秦寺と呼ばせた。飛鳥時代の孝徳天皇白雉5年(654)から斉明天皇時代を経て天武天皇4年(675)に至る21年間にペルシア人が飛鳥に来朝しているが、こちらは景教徒ではなかった。しかし、景教徒阿羅本はペルシア人名であった。阿羅本(ア・ラク・プオン)はアラーボーンを写したものである。阿羅本はバルフ出身のペルシア人であった。現在でも北部アフガニスタンの通用語はペルシア語で、最近のアフガニスタン内乱での北部同盟の言語はペルシア語である。アラーボーンもアルターヴァーンの転訛である。阿羅本の羅ラクは、次に来るプオンの最初の子音につづき、羅が長音ラーを写したことを示唆する。孟蘭盆の蘭ランも次に来る盆プオンの最初の子音につづき、蘭が長音ラーを写したことを表わす。景教徒阿羅本と同時に来唐した者の1人に阿羅憾がいる。阿羅憾はア・ラー・カムつまりアルターカーン/アラーカーンを写したものである。アルターカーンはアルターヴァーンと同じく、天則にのっとった者を意味する。及烈(ガブ・リエト)は、古く佐伯好郎や桑原隲蔵が論じたようにガブリエルのことである。羅含という人名が出てくるが、これは阿羅憾の阿が落ちた羅憾と同じ音で、アラーガン/ラーガンを写したものと考えられ、同一人物かどうかは別として同一名である。

斉明天皇3年7月15日、飛鳥寺の西に須弥山をつくり、孟蘭盆会を修し、夕方、筑紫に漂着したトハレスタン人男女を供宴に招いた。孟蘭盆ではこの日、僧らに飲食を供養する義務がある。さらに異界から来訪した漂着者らにも飲食を供した。7世紀中葉の中央アジアの祖先祭は、大乘仏教、ゾロアスター教、中国民俗(道教)の3つの宗教の混合の結果成立したと考えられる。道教には、旧暦1月15日(上元)、7月15日(中元)、10月15日(下元)の3つの季節のはじめがあった。ヘロドトス『歴史』(1,199)が伝えるバビロン

の一夜婚では、旧暦2月下旬の春分に年1回の男女の交会が行われ、11月下旬の冬至に神の子が誕生する仕組みになっていた。

道教では、春分に近い立春正月の1月15日の上元に男女の交会をせず、7月15日の中元の1週間前の立秋前後の7月7日の七夕に男女の交会を行った。群行して来訪する祖先霊と、これを迎える巫女の役割を演じた女性らの交会の結果は、翌年4月上旬の立夏前後に神の子として出現した。道教でも古くは他の文化圏と同じように、立春前後に当たる1月15日の上元あるいはその1週間前の1月7日（7月7日の6か月以前に当たる）の人日に男女の交会が行われたであろう。その結果は立冬前後に当たる10月15日に誕生することになった。道教の上元は季節的には中原の気候に合致するが、上元の気候は中央アジアから長安に至る山岳地帯ではまだ春の気候には至らなかった。旧暦3月から6月にかけての炎熱の季節が収まった立秋前後が先祖を迎えるに適した季節であった。西南アジアにおける春分の男女の交会は、長い冬を終えて神の精を受胎しようとする明るい希望に燃えていた。東大寺二月堂のお水取りは、西アジアの春分の死と再生の儀礼がそのまま入ってきた。これに対し、立秋における祖先祭は、仏教的な哀愁に満ちた祭りであった。中央アジア的な厳しい風土と縁のない日本には、春分と立秋両方の習俗が入ってきた。ヨーロッパには春分における精霊受胎の思想だけが伝わり、カトリックの受胎告知の3月25日と聖誕の12月25日が伝承されている。

東南アジアで活動する華僑は、福建省、広東省出身者が大半を占め、北伝の大乗仏教の影響下にある。そのために、周辺の小乗仏教の行事とは異なるものを持つ。華僑は大乗仏教の盂蘭盆を伝承している。彼らは7月15日、空き地や辻に土石を盛り上げて2メートル近くの高さの小山をつくる。それを城と呼んでいて、その中に死者の霊魂が閉じ込められているという。盂蘭盆の法事と供養が終わると、打城といって城を壊す。その結果、城の中に閉じ込められた亡き人びとの霊魂が解放され、死者は再生すると信じられている。本来はこの小山は祭壇で、中にいる亡者は神仏に供物として捧げられた死体であった。死者は神仏の前に供えられ、祭りと共に再生したのであった。華

僑がつくった城は、盂蘭盆会の終了と共に撤去される。

祭壇は、本来は適時づくり、祭事が終わると共に撤去された。ヘブライ人の祭壇はミズベアアハつまり屠殺の場所と呼ばれ、土の堆積あるいは自然石から成っていた。壇上で犠牲獣を屠殺し、その血と脂をまき、周りに掘った溝に流し込み、同時に獣を焼いてその煙と匂いを天に送った。肉は神と共食し、祭りが終わると屋外の土壇は取りくずして地面と同じに平らにした。祭壇は後になると固定して撤去しないようになり、特定の祭り以外は屠殺も行われなくなる。因みに、日本の古代の神官は祝（はふり）と呼ばれたが、神道にも供犠を解体する神事があったことを示唆する。

インドのアショーカ王は子供のとき仏に供養した果報により鉄輪王となり閻浮提えんぶだいの王となった。王は鉄圜山の谷にある地獄で罪人が懲罪されるのを見た。王は獄に入った。比丘が王に法を説き、王は懺悔して悟りを得た。王は獄をこわし、以後は三宝を信じ受戒した。地獄は四方に高い石垣を築き、中に種々の華果を植え、浴池があった。牢には門戸があり、もし人が入れば二度と出られなかった（『法顕伝・宋雲行紀』長沢和俊訳注、東洋文庫、1971年、113-5頁）。最近新聞紙上を賑わした中国西安の西部で発見された西周の王侯墓群の周辺では、厚さ10メートルの城壁が東側700メートル、北側300メートル、西側500メートル、合計1500メートルにわたって見つかっており、墓域は20万平米に達することがわかった（『毎日新聞』'04.5.31）。地獄そのものを城と呼んだり、広大な墓地群を城と呼ぶ背景が浮かんでくる。鉄圜山は須弥山を取り巻く山と海の1つで、別の見方をすれば須弥山の外縁部に死者のおもむく世界、地獄があり、アショーカ王はそこを訪れて懺悔し、地獄を破ってよみがえったのである。アショーカ王が見た地獄は城であり巨大な祭壇であった。祭壇には供犠したが、犠牲は神仏そのものであり、神仏を活性化させると同時に犠牲自体もよみがえった。アショーカ王は自らを供犠したあと、地獄を破ってよみがえったのである。

仏教では曼荼羅の漢訳は旧訳くやくでは壇、新訳では輪円具足、聚集と訳しているが、その意味するところは、神聖な円形の壇上に仏・菩薩、牛馬のような



(祖先) 獣が充満しているイメージであった。最初はマンダラは絵画ではなく『陀羅尼集経』（『大正蔵』18. 813-6）に詳しく述べられているように、土を盛って壇をつくり香泥を塗り、その上にマンダラを描いたもので、これを土曼荼羅という。最初に界線を引き、最後に尊像を描き込むまで7日かかる。マンダラができると、そこで灌頂の儀式が行われ、儀式が終わるとそのマンダラは直ちに壊してしまうのが通例であった（眞鍋俊照『曼荼羅美の世界』人文書院、1980年、12-3頁）。曼荼羅は土壇で祭壇であった。そこに描かれた仏・菩薩や動物は再生を待つ祖先霊の表象で、壇を破壊することによって壇の中から出現して再生した。アショウカ王は自ら土壇（地獄）に入り、祖先や祖先獣と合体したあと、壇を破って再生した。ヘブライ民族が、定住していようが荒野を放浪していようが、祭りが終わったあとは祭壇を破壊したことを想起させる。ヘブライ人は、神聖な祭壇を敵に見付けられて穢されるのを避けるために破壇するという教義をつくった。

東大寺二月堂では、3月1日からつづいた修二会が14日に終わると、3月15日、上堂して破壇が行われる。修二会中、須弥壇を飾っていた造花や壇供の餅がさげられ、荘厳具も通常のそれに戻る。造花の椿に代って椿しきみが供えられる。内陣は2時間ほどで元の簡素さに戻る（東京国立文化財研究所芸能部編、担当者 佐藤道子『東大寺修二会の構成と所作 別巻』平凡社、1982年、490頁以下）。餅は上七日と下七日に供えるが、合計2000個に及ぶ。もっこで運び出すほどの多さである。拳大の石を積み上げるイメージの餅の山は、須弥壇が土砂でできていた時代の名残りであろう。一見、内陣内で固定されたかのような壇であるが、修二会の終了と共に涅槃講が修せられる。盂蘭盆会では7月15日の破壇によって、亡者は壇から外に解放され、魂の更新を獲得するが、涅槃講の場合は永遠の寂靜の中に入り再生することのない釈尊に対してではなく、講を修する練行衆に対して功德がある。

踐祚大嘗祭のために建てられた悠紀殿と主基殿は、祭りが終われば直ちに破壊した。柳田国男はいう。1代に1度の祭りのために、伊勢の度会氏は椎、萱、菰、藤、蔓をあらかじめ運ばせておいて、当日一同が手水を済ませてか

ら急いで仮殿の構築にかかり、祭りが終わるとすぐにそれを取り崩して、その材料を少しずつ参列者に分配して持ち帰らせた(「山宮考」)。このように、神の家屋の代理をなすものをヤシロといったが、社殿が常設のものとなってしまったからは、その語義が考えられなくなってしまった(田中初夫『踐祚大嘗祭』研究篇、木耳社、1975年、39頁)。悠紀殿と主基殿にはそれぞれ神を迎える祭壇があったが、これらの祭壇は祭りの直前に質素な神殿と共につくられ、祭りが終わると直ちに取り壊された。谷川健一はいう。大嘗祭のときの悠紀殿と主基殿は新帝が先帝の魂と同衾し、擬死再生の儀式を行った所であり、まどこ・おぶすまは喪屋に相当するものである。悠紀殿と主基殿は大嘗祭の直前に建てられ、使用後即日毀されるのが古来のしきたりであった。平成の大嘗祭では祭りが終わっても、悠紀・主基の両殿を幾十日も保存して国民の参観に供した。これは祭りの本道からすれば邪道であり、日本の祭りの古式を知らざる宮内庁の余計なサービスであるといわざるをえない(「密閉された再生の容器」『東アジアの古代文化』89号、大和書房、1996年、7頁)。

愛知県奥三河に花祭りという民俗芸能が残る。祭りの最後に浄土入りがあった。浄土入りはこの祭りでは白山しらやまという不思議の空間に入ることであった。白山は高さ約3間、大きさは2間四方、屋根はなく、4壁は青柴を束ねて囲い、無数の白幣が挿してある。床の高さは約2尺あり、床の下は青柴の束が敷いてあり床の上に白布が敷いてある。中央に梵天を飾り青、赤、黄、黒、白の5色の布が四方に張り渡してある。白山の中へは、白装束姿で経文で敷きつめられた橋を渡って入る。この中で葬式で用いる箸が1本突きさしてある枕飯と同じものを食べる。この瞬間、神楽に出ていた鬼たちが白山の四方の入り口から突入してくる。その後、白山は破壊され、神の子が誕生したと認識される(宮田登『神の民俗誌』岩波新書、1979年、126-30頁)。

白山の2尺の高さの床は祭壇を意味した。そこに白装束で入り枕飯を食う者は死者を表わした。死者は(三途の)川を渡って白山に入る。神楽に出ていた鬼たちが一斉に入ってくるとあるが、鬼は怖い、悪い存在ではなく、あの世の死者を表わした者で、白山の中の白装束の死者をあの世の同朋として

迎え、あの世での再生を助けるのである。白山は直ちに破壊せられ、祭壇に供えられた死者は神の許に送られ、神の子として再生する。白山はアラビアのメッカにあるイスラム教徒の総本山であるカアバ神殿と同じものであり、イランのアケメネス帝国の古都ペルセポリスの西北数キロメートルの地点ナクシェ・ロスタムにあるダリウス大王ほか3人の帝王たちのギリシア十字型に彫んだ断崖墓の前面にあるゾロアスターのカアバと同じものである。同類は近くのキュロス大王のパスルガダイ宮殿の西北にも崩壊寸前の姿で残っている。このような直方体の構造物は、日本の家屋の西北にある床の高い倉(蔵)と同じもので、乾(西北)の方角から去来する神々を祭る祭壇であった。このことは以前に論じたことがある。

『プルターク英雄伝』「アルタクセルクセス」(三)(河野与一訳、岩波文庫、1956年)にいう。アルタクセルクセス2世は父ダリウス2世が死んでからしばらくたって、パスルガダイに出かけて即位式を行おうとした。ここにある神殿で、王は衣服を脱ぎ、昔キュロス2世がペルシア帝国を創立したとき身につけたマントを着て、イチジクの乾燥果実を食べ、テレピン油と1杯のヨーグルトを飲んだ。ほかに何をするのか、他の人びとには不明である(65-6頁)。王は祖先の衣服を身にまとい、葬儀の供物にされるイチジクの果を食べ、塗料を薄める溶剤を含有する樹木をかじって朦朧とする中、何ら加工しない強い酸味をもったヨーグルトを口にして、祭司によって王権を身に移された。プルタークのいうパスルガダイは、アケメネス王墓のあるナクシェ・ロスタムを指したと思う。王はここにある直方体を出てよみがえり、新王として即位した。日本の白山の内部では、屍衣をまとった行者が枕飯を食って神の子、つまりあの世の幼児として再生する。古代ペルシアのカアバの場合、祭りが終わったあと石造建築物は破壊されず、毎回、王の即位式には使用されたと考えられる。

ナクシェ・ロスタムと恐らくはパスルガダイのカアバには、地上4-5メートルの所に1つだけ入り口がある。メッカのカアバは向かって左がわに入り口があるだけである。古くは右がわの対称の位置にも入り口があったので

はないかと思われる。メッカのカアバ神殿の床面は地上2メートルほどの高さにあるので、内部に入る場合、空港にあるような移動式タラップに類するものが必要になる。カアバ神殿の周囲には8本の放射型の道路があり、八方から信者が集まることができる。白山の床をはじめ、カアバの床は地表から突出した臍へそといわれるもので、この大地のへそつまり大地の胎から神の子が生まれたのである。大地のへそは祭壇であり、そこに死者が供えられて再生するのであった。へその緒の出発点である円盤状の肉塊である胎盤を古代人は生児のへそと繋がる母胎のへその根元と考えた。大地に投影された地母神のへそが、白山やカアバのへそであった。大地のへそは胎盤で、胎盤は羊膜を子宮に結びつけるが、これを表象したのが大地のへそを囲む壁である。壁は四角いものと、ゾロアスター教徒の葬場である沈黙の塔や韓国慶州に残る新羅時代の瞻星台のように円く囲った壁がある。メッカのカアバ神殿は、祭りのときだけ10メートル以上ある天井の隅にある上げ蓋を上げて平たい屋根の上に出ることができる。白山や沈黙の塔や瞻星台の場合は屋根はなく天と通じている。羊膜が閉じているか開いているかは、文化によって差異がある。出産後、胎盤は廃棄された。それに倣って祭壇も廃棄された。

平成16年5月から6月にかけて、中国陝西省における発掘結果が報道された。西安の西の岐山県で陵墓群が見付かり、そこで19基に及ぶ西周の王か諸侯の陵墓ではないかと思われるものが出土した。その理由の1つは、四角い陵墓の四方に道が付いていることであった。前代の殷の王墓である亜字型大墓も四方から階段を降りて榭室に入る構造になっていた。四角い榭室には4つの入り口があったことになる。花祭りの白山には四方の壁に入り口がある。何のための入り口かは説明されていないが、この祭壇が天地四方に開かれていることを表わしたのであろう。白山の4つの入り口と天に通じる天井は5つの色で象徴された。なかんずく黄色は天を象徴した。カアバ神殿は現在は1つの入り口と天井の上げ蓋の穴しかない。白山はこの点、最古の構造を保っているようである。亜字型大墓の榭室の下には腰坑と呼ばれる穴が穿たれ、その底は当時の地下水面に達していた。死者の魂が船に乗って地水の流れ

に棹さして冥界に行けるように掘ったと説明されてきた。

腰坑は死者の腰の下に掘られてあるのでそう呼ばれた。腰と首は要と領で示されるように、人体の核心部分で、この穴に腰に宿る生命力を入れ、船で冥界に運んだというのである。穴には（四つ目の）犬を入れた。犬の骨のほかに人骨や武具も出てくる。墓室内の床面から地下水面までの直方体は本来の土壇で、槨室の四辺には掘立柱が立てられて土壇を囲う壁をつくりカアバを形成していた。地下に掘ったように見える腰坑は、実は地上あるいはへそ面に掘った穴で死体はこの穴の上に供犠された。カアバ、瞻星台、清涼殿の石灰の壇など、大地のへそと称されるものの床面に穴が掘ってあるが、これらの穴と腰坑は同じものなのである。腰坑に供犠された（四つ目の）犬が死者をあの世へと導いた。坑の中にときに見られる人間は死者に供犠された者で、死者を賦活するための死者の他我であった。これら一連のへそは祭りの終了後も破壊されることがなかった。破壊される祭壇と固定された祭壇の間にどのような差異があったのか考えなければならないであろう。

松前健はいう。古代の神は常設の神殿をもたず、祭りのときに遠くから来臨した。人びとはこれを迎えるためにそのつど新しい仮宮をつくり、<sup>かんみそ</sup>神衣を織り、新酒や飯や魚介を供した。祭りが終われば建物は焼かれたり壊されたりした。建物をはじめ一切を取り替えるという古代の様式は、20年目ごとの祭りとして残り、今日に至ったと考えられる（「皇大神宮・豊受大神宮」、谷川健一『日本の神々』6、白水社、1986年、22頁）。伊勢神宮の場合、神が常在するわけではないが、心の御柱と社殿が古くなると取り替えるという観念が発達し、その精神で遷宮が行われるようになった。さらに20年というのは、旧いタイプの太陰太陽暦で8年や19年が宇宙を代表する太陽と月が同じ出発点に戻る年数であったので、これに同調したものであったとも考えられる。現在は京都御所の紫宸殿に安置されている高御座は、<sup>たかみくら</sup>今上天皇の即位礼に際し、分解して東京の皇居に運送され、組み直されて漆、金具、布類などを一新し、式後はまた京都に送り返された。もっとも原初の高御座に相当する壇は、悠紀殿と主基殿が式の直前に建てられ、直後に破壊されたのと並行

して破壊されたと思われる。先帝の死と新帝の即位は死と再生の儀式であるので、新帝の再生と同時に胎盤と同じ壇は破棄されるべきものであった。

同じことは葬儀の喪屋についてもいえる。天若日子は、天孫降臨に先だち大国主命に国譲りの交渉に出かけたが、大国主の娘と結婚し復命しなかった。天神は雉を送って命令を伝える。若日子は天神から授かった弓矢で桂の木に止まっている雉を射殺させた。矢は雉を射通して天上に達したが、天神がこの矢を下界に投げ返すと、ちょうど新嘗の物忌みの床に臥せていた若日子の胸をつらぬき若日子は死んだ。そこで喪屋を建て8日8夜号泣と歌舞音曲のうち葬を行った。このとき、妻の兄アヂスキタカヒコネノ神が弔問に来るが、若日子の家族は若日子が復活したと信じ彼に取りすがる。彼は死人と同一視され、喪屋を破壊して飛び去る。若日子の妻は兄を讃えて歌う（『記紀』）。天孫降臨は重要な節目に行われた。それは新年のような季節の変わり目であった。天若日子は太陽がいちばん弱くなった冬至の日に新嘗の儀式をして床の上で物忌みしていた。天神から送られた若日子のトーテムである雉を殺し、その力を弱ったわが身に移し、その直後、雉を殺した同じ矢で射殺される。若日子は下界の王である大国主の息子アヂスキタカヒコネとしてそのままの形姿で再生する。再生したアヂスキタカヒコネは喪屋を切り切り伏せ蹴散らして飛び去る。喪屋は死者を安置する祭壇である。再生儀礼が終わるやいなやそれは破壊された。この死と再生の儀礼は、冬至に天孫が降臨し、コノハナサクヤ姫と結婚する直前に行われたと考えられる。シュメルの世界最古の文学である『ギルガメシュ叙事詩』では、ギルガメシュ王が不死を求めて冥界にウトナピシュティムを訪ねてゆく直前、王の他我に等しい親友であるエンキドゥの死と葬儀がある。殷の亜字型大墓では、埋葬された王の腰の下の腰坑には供犠された人物がいる。天孫にとって下界はあの世に当たる。天孫降臨の直前に天孫の他我である天若日子の死と再生がある。これらの死と再生の儀礼は祭壇を破壊することによって完了したのである。

アル・ビールニー『古代諸民族の暦法』（C. エトヴァルト・ザハウ訳、ロンドン、1879年〈フランクフルト、1969年〉）にいう。1月6日、イラン

の始原の王ジャムシードはあらゆる国民に古い神殿を破壊し、同じ日に新しい神殿を建ててはならないと命令した(202頁)。アル・ビールニーによると、1月6日は大正月とされ、ペルシア人にとっては重要な祭日であった。1月6日は神が天地を創造した最終の日で、この日の朝、芳しい草花を手に持った沈黙した人影が山上に現れ、1時間ほど留まっているが、やがて見えなくなり、翌年の同じ日に再び現れる。これは南の地域から太陽が昇ることを表わした。それまでは悪魔によって世の中が枯死の世界とされ、饑饉が起きていたが、この日にジャムシード王が現れ、国民は公正と繁栄の状態に戻った。人びとは2つの太陽が昇るのを見た。枯れた樹木は緑の葉で覆われた。そこで人びとはこの日を新しい日つまり新年と呼んだ。それ以来、この月に円い皿に7種の穀物を播いて発芽させ、その年の豊作、不作を占う(アル・ビールニー、前掲書、201-2頁)。

1月6日は神が全ての創造を終えた日で、当時のイラン人はこの日を大正月と呼んだ。昨年の12月の月末の6日間と合わせて12日間が正月とされたのかも知れない。のちになってから1月12日あるいは13日で正月が終わるように推移したのではないかと考えられる。ゾロアスター教暦では、30日×12月+5日が1年の日数であった。この世を訪れてきた祖先の靈魂は年末の閏の5日間と年初の5日、この世に留まり、あの世に帰っていった。現在のイラン人の正月行事では、祖先は正月1日にこの世を訪れ、13日にあの世に帰る。1月6日までの前半6日間を人民の正月または小正月しょうしょうがつと呼び、1月7日から12日までの6日間を王侯の正月または大正月と呼んだ。13日は付け足しの1日であった。イランでは10日正月、12日正月、14日正月が地方により、時代により見られ、それぞれの最後の日にさらに1日の余分が付いていた。1月13日の戸外の13日がこれで、この日にイラン人は郊外の川辺や水辺に出て祖先を送り、ピクニックに興じて家路につくのである。

14日正月+1日、つまり15日間の正月は広く見られる。正月15日を小正月しょうしょうがつと呼びならわしてきた。それでは大正月はいつなのか。正月1日あるいは人日と呼ばれる正月7日であろう。人日は12日正月の後半初日である一方、14

日正月の前半最終日でもある。出生の日であり死亡の日でもあった。日本では正月前半部は殿様の正月といい、後半部を百姓の正月と呼んだ。小正月の喧噪を町人・百姓に帰したための命名であろうか。

1月6日はキリスト教のエピファニーで、教派によって呼び名が異なる。正月6日はキリスト教以前から聖なる日であったので、キリスト教はその影響を受けたと考えられる。正月6日はゾロアスター教の開祖であるゾロアスターの誕生日であった。ゾロアスター教では旧い年の最後の5日間と新年の5日間の合計10日間、祖先の靈魂がこの世を訪れ、個人の家あるいは地域に留まる。1月6日は祖霊たちがあの世に帰る日である。ゾロアスターは祖霊の帰還の直後に誕生する。キリスト教の主の顕現日も1月6日である。東方正教の一派であるアルメニア教会やローマ・コプト教会の流れを汲むエチオピア教会では1月6日はクリスマスである。東方教会に属する東京のニコライ聖堂では、1月6日はクリスマスで、5日の夜にクリスマス・イヴの礼拝を行う。クリスマスから12日目の夜1月5日から1月6日にかけて十二夜が祝われる。クリスマスを古い年の始まりとすると、十二夜は小正月に当たる。小正月こそ本来の新年であった。現在でもスペインやイタリアなどのカトリックの国では、クリスマス飾りである神の子の誕生を祝う箱庭は1月6日まで道路に面した庭に飾られる。

西方教会の流れを汲む日本聖公会は、かつては1月6日を現<sup>げん</sup>異<sup>い</sup>邦<sup>ほう</sup>日と呼んだ。クリスマスは12月25日である。西方教会では、1月6日のエピファニーでは幼児イエスが東方の3博士の前に姿を現したのを祝う。1月6日は、12月25日を新年として数え始めると、新年13日に当たる。多くの文化で、2部から成る新年、すなわち6日+6日、7日+7日が終わった翌日の13日や15日をことに小正月として祝う。5日+5日のあと11日の小正月もある。ゾロアスターの誕生日は、1月5日の正月のあと、あるいは昨年末の5日の閏日と年初の5日を足した10日正月のあとに当たる。ギリシア正教やロシア正教にはその伝承はないが、西方のローマ正教、聖公会、ルーテル教会には1月13日の主の洗礼日がある。現在はエピファニー直後の日曜日に移行している。



イエスがヨルダン川で洗礼を受けたとき、天にいる父が聖霊を注ぎ、愛する子と宣言した日である。現在のイランでは、12日間の正月が終わった1月13日、郊外の沢に出かける。正月に子孫の許を訪れた祖霊をあのに送り返すために沢に出かけ、夕方まで歌い、踊って楽しみ帰宅する。洗礼のような儀礼はないが、祖霊からエネルギーを受けて再生する点はキリスト教の伝承と同じである。イランの場合、人びとは沢や川で水を浴びるわけではないが、個人個人が春分正月の13日（4月上旬に当たる）に生命の水の傍らで祖霊の祝福を受けるのである。4月上旬は、キリスト教の復活祭の季節であり、極東の旧暦3月3日の禊浴の日がくる季節である（キリスト教資料は、八木谷涼子『キリスト教歳時記』平凡社新書、2003年、59-65頁を参照した）。

奈良東大寺の二月堂修二会は現暦3月1日から3月14日まで修せられ、3月15日には釈迦の涅槃会が修せられて満願となる。3月1日から7日までの上七日じょうしちにちと3月8日から14日までの下七日げしちにちから成り、3月5日に二月堂開基実忠の実忠忌があり、12日には生命の水を汲むお水取りがある。上七日は死の儀礼に属する前半部で、下七日は再生の儀礼に属する後半部である。旧2月15日は春分と重なったと考えられる。あるいは2月15日の満願のあと春分を迎えたとも考えられる。春分を正月とするのは中近東、ことにイラン文化圏に於てであって、立春前後を新年とする唐文化に於ては考えられないことである。

正月7日は前述したように、12日正月か14日正月であるかによって、生の日とも死の日とも見なされるようになった。ゾロアスターの誕生日は1月6日であった。この場合、1月6日は10日正月の後半の初日で、死の儀礼が行われる5日までの前半の翌日の再生・誕生の日である。アル・ピールーニーによると、悪魔イブリースによってひき起こされた飢餓は1月6日に出現したジャムシードによって撲滅させられ、人びとは繁栄を取り戻した。ジャムシードは近世ペルシア語のイラン神話の始原の王で、古代イラン語のアヴェスタ語ではイマ・クシャエータといった。その意味は「光り輝くもイマ王」である。イマは古代ペルシア語でヤマ、サンスクリットではヤマとなる。サ

ンスクリットのヤマは漢訳仏典で閻魔と音訳される地獄の王である。一方、イランのイマ、ヤマ王は始原の王で、アル・ビールニーのジャムシードは1月6日に現れる。1月6日は、10日正月の後半の初日で、再生・誕生の日である。インド・イラン文化のヤマ王は、インドでは終末の王、イランでは始原の王として現れた。古代イランでは始原の王であるイマ／ヤマは「光り輝く」というエピセツを持つ。始原の王イマ／ヤマは1月6日のゾロアスターの誕生日に太陽として出現する。この日、ジャムシード（ヤマ・クシャエータの近世ペルシア語）は古い神殿を破壊するように命じ、その同じ日に新しい神殿を建てることを禁ずる。アル・ビールニーは新しい神殿をいつ建て替えるかについては言及していない。1月6日は教祖の誕生日であるので始原の日であるべきなのに、この日に破壊が行われた。恐らく1月7日に始原の日は移行していたのであろう。古い神殿を壊すというのは、神殿の祭壇を破壊し再生することを意味する。新しい神殿はその日に建ててはならなかった。新しい神殿は仮の建物で、それは次の祭りに際してつくられ、その祭りの終了と共に破棄されるものであった。神殿は恒常的なものではなく、ヤシロ（屋代）であった。

ユダヤ教徒の政暦は1月ティシュリー月で、1日と2日はローシュ・ハッシャーナ（1年の始まり）で、10日は贖いの日ヨーム・キップールであった。ヨーム・キップールは古い十日正月の最終日であった。現暦では9月中旬から10月中旬に当たり、ユダヤ教徒は1年でこの日だけ断食をする。15日から22日（9月下旬から10月）の8日間<sup>かりいお</sup>は仮庵の祭りを行う。この祭りは、6か月あとの教暦1月（ニサン月）15日から21日の7日間つづく過ぎ越しの祭りと対応する。過ぎ越しの祭りは3月下旬から4月中旬にくる。仮庵の祭りは、過ぎ越しの祭り、刈り入れの祭りと共に三大巡礼祭の1つとされ、もっとも重要な祭りとされた（「申命記」16.1-17）。この祭りは年の終わりあるいは年の始めに行われ、季節としては秋の祭りであった。仮庵は耕地に急ごしらえにつくられた小屋で、祭りの終了と共に取り払われる仮小屋であった。仮庵の祭りは降雨と関係があり、この祭りのためにかつての敵でもエルサレ

ムに上らない者には雨が降らないといわれた。この祭りは水を汲む祭りでもあった。仮庵の祭りは、契約更新あるいは神殿奉獻などの挙行にもっとも望ましい機会を提供した（アラン・ウンターマン『ユダヤ人』石川耕一郎，市川裕訳，筑摩書房，1983年，254－9頁；『旧約・新約 聖書大事典』教文館，1989年，332－3頁，「かりいおのまつり」）。

イラン神話では、インド神話の終末の王ヤマに対応するイマ(ヤマ)王は、長雨のあと生じた洪水をしのぐため、ノアの方舟に対応するワルという巨大な方舟をつくる（『アヴェスタ』「ウィーデーウダート」第2章）。ノアの方舟は、アラビアのメッカにある大洪水の中に浮かぶカアバ神殿を想起させる。さらにそれは、アケメネス朝の王陵の地ナクシェ・ロスタムにあるゾロアスターのカアバと同類である。ユダヤ教徒の仮庵には雨の記憶と水を汲む記憶しか残っていない。洪水の記憶はさらにはない。仮庵は「仮りの屋」つまり日本の「やしろ（屋代）」と同じもので、祭りの場でつくり、神を呼び寄せてその力を受け、祭りの終了と共に神が去るので仮庵は破壊する。庵の中に設けた壇もいっしょに破壊するのである。祭壇は生と死を象徴する2つのものを中につくったであろう。それは土壇であったかも知れないし、2つの石であったかも知れない。仮庵は仮のものであるが、これが固定したものが後に神殿の至聖所に安置された契約の箱ではないかと思う。

契約の箱は初期は簡単なものであった。アカシアの木でつくった箱に、十戒を書いた2枚の石板が入っていた（「申命記」10.1－5）。初期は2枚の石板以外、何もなかったが（「申命記」8，9），のちになると箱は金で覆われ、中にはマンナ（天のパン）の入った金の壺，芽を出したアロンの杖が2枚の石板と共に入っていた（『新約聖書』「ヘブライ人への手紙」9.1－5）。契約の箱には長い担ぎ棒がついていた（「列王記」上，8.8）。日本の神社の神輿みこしのように、ときには強訴，戦場で人びとに担がれて移動した。仮庵と神輿は同じもので、神輿の移動の前に神輿洗いといって多量の水をかけたり、天王祭で海や川にざんぶと投げ込む祭りが見られる。ノアの方舟の記憶がこの慣習の中に残っている。

『邪視』(奥西峻介訳, リプロボート, 1992年)の著者F.T.エルワージー(1830-1907)は, 19世紀の末, 大英博物館でわが南方熊楠(1867-1941)と知り合った研究者である。明治45年(1912)4月10日, 南方から柳田国男に宛てた書簡に以下のようなことを書いている。エルワージーは, むかし江戸で小児がかきまわった浅間権現の額をつけた神輿を手に入れ, 大英博物館へ奉納し, これはノア方舟から出たものだと主張してゆずらなかった。小生は, そんなむつかしいものではなく, 小児の祭りの翫具だといったが聞き入れようとせず, 実に難儀な爺様だった(『南方熊楠全集』8, 平凡社, 1972年, 300頁; 飯倉照平編『柳田国男 南方熊楠 往復書簡集』平凡社, 1976年, 266頁)。神輿をノア方舟と関係づけたのは, その論拠は知らないが, エルワージーに分があると思う。契約の箱の蓋には1対の有翼人面獣ケルビムが取り付けられた(「出エジプト記」25.18)。日本の神輿の屋根には鳳凰や葱花が付いている。「列王記」上, 6.29によると, ソロモン神殿の周囲の壁面はすべて, ケルビムとなつめやしと花模様の浮き彫りが施されていた。契約の箱は四角い直方体あるいは立方体であったが, 神輿は四角, 六角あるいは八角のものがある。神輿の中のご神体は2つの祭壇を表象するものが安置されるのであろう。契約の箱や神輿の屋根には, 新旧のトーテムである鳥と植物が付くのが古い形式であったと思う。鳥も植物も, 祖先霊の表象であった。いずれかが生を, 他のいずれかが死を象徴した。箱や神輿の中に安置した2つのものも同じであった。神輿の中にも初期は2つの石を置いていたのであろう。これら2枚の石板や石はへそ石(オンパロス)であった。仮庵の祭りの際の仮庵にも神が依りついたであろう。契約の箱の2枚の石板にも神が依りついた。

ギリシアの伝承では, ゼウスは地球の中心がどこかを確認するため, 地球の東西の果てから2羽の鷲を同時に同じ速さで中心に向かって飛ばせた。鷲はギリシアのデルポイで出会った。そこで, ゼウスの子アポロンの神殿に, 左右に黄金の鷲を伴った神聖なへそ石を設置した。へそ石は低い四角い壇の上に卵の半分を載せた形で表わされた。ときに, 卵の全部の底だけを平らに

して、壇の上に立つような形で表わされた。へそ石はさらに、地上に突き出した自然の、あるいは人工の突起物を指すようになる。この場合は、突起物の上部に凹みあるいは穴がある。穴はへその穴で、この穴から神の子が生まれると信じられた。へその穴は神の子が生まれる穴であるばかりか、死者の魂がこの穴を通して異界におもむくとされた。『プルターク英雄伝』「アルタクセルクセス」の伝える所によると、アケメネス王朝の大王の遺体はパサルガダイ（現在のナクシェ・ロスタム）にある直方体の巨大な石積みの建物（アラビアのメッカにあるカアバ神殿と同類のもの）に入れられ、後継者である皇太子が暗闇の中での儀式のあと新王に即位した。この建物（現在、ゾロアスターのカアバと呼ぶ）の床の中央にも穴があった。死んだ大王の魂は遺体から遊離して穴の中に入り、穴から生まれ出たとされる皇太子が大王として生まれ変わった。死せる大王の遺体は、カアバの前面にある崖面にあけられた巨大なギリシア十字型の墓に葬られた。カアバと岩窟墓は20メートルほどしか離れていないが、大王の遺体から遊離した魂の行方については明らかにしえない。

ゾロアスター教徒の葬場である沈黙の塔は、床面が地上1メートル以上、土石を積み上げてつくってある。床面は直径が10数メートルあり、周囲は高さ2メートル以上の土堀で囲ってある。円い床の中央に径1メートルほどの深い穴が空いていて、床面にたまった白骨が投げ込まれる。死者の魂もこの穴に入ってゆく。ゾロアスター教徒は大地を穢すといって土葬しない。彼らは鳥葬して死者の肉は鳥に食わせる。肉といっしょに魂は天空に運ばれることになるので、穴に入ってゆく魂は人間に内在する数種の魂の1つであったのかも知れない。

カアバの床は四角い。カアバと同系の韓国の慶州にある新羅時代の瞻星台は円い。いずれも床の中央に穴がある。ゾロアスター教の沈黙の塔の床は円く、中央に穴が空く。四角い床も円い床も大地を象徴したもので、大地の中心は、人体の中心がへそであるのと同じように、へそ（石）であった。中心にはへその穴を象徴する穴があった。イスラム教の聖地メッカのカアバ神殿

の床の中央に、直径60センチ、深さ60センチほどの穴がある。カアバ神殿はイスラム教以前からメッカに存在し、異教時代の聖地として崇拝されていた。7世紀になってマホメットはイスラム教を唱導し始め、メッカに攻めこんで異教徒のカアバ神殿を占領した（630年）。このとき、マホメットは床の穴の中に安置してあったフバル神の神像を取り上げ、神殿の外に投棄した。『コーラン』には言及されていないが、フバル神像は黄金とエメラルドでできていた。別の伝承によれば、<sup>あかめのう</sup>体軀は赤瑪瑙でできていたが、腕は黄金であった。カアバ神殿には360のアラブの部族が、毎年それぞれの部族の祖先神の新しい偶像を神殿にもってきて奉納し、古い神像と取り替えて帰っていったという（各種のイスラム関係の辞典類から）。フバル像がこれらの偶像の中でもっとも崇拝され、神殿内の床の中央にある穴に安置されていた。フバル像は瑪瑙と黄金、エラメルドと黄金からできているなど諸説があるが、生と死を象徴する2種類の物質でつくられたものであろう。東大寺大仏殿の南の南大門では、本来生と死を象徴する1体の仁王像が左右1体ずつにわかれ、それぞれ片足草履を奉納されて立っている。

ユダヤ教徒の契約の箱には2枚の石板が入っていた。「出エジプト記」25章から35章によると、ユダヤ教徒は移動するたびに宿営地の外部に幕屋を張り、聖所を設定した。ここでは2つの正方形が横に並び、1つの正方形の中心には契約の箱が安置される至聖所があり、他の正方形の中心には祭壇が設けられた。至聖所の前には階段があった。この点、日本の神社と同じである。幕屋は移動中、神がつねにユダヤ教徒と移動するのではなく、ときに火の柱や雲の柱として顕現した。この点、幕屋はわが神社の起源である屋代<sup>やししろ</sup>と同じ思想に立っており、仮庵の成立とも等しいものをもっている。仮庵は祭りのあとは破棄したが、幕屋の場合は契約の箱は人びとに担がれたり駱駝の背に載せられて移動した。契約の箱そのものが神ではなかったようである。もう一方の正方形の中心にある祭壇の前にも階段があった。祭壇は聖俗の境界にあり、神が顕現する場所であるが、ここで火を焚いて燔祭を行った。幕屋の構造はそのままエルサレムの神殿に投影されている。ソロモンの神殿には、

至聖所に安置された契約の箱の前に黄金の祭壇が設けられていた（「列王記」上、6.19-22）。前室に安置された祭壇も黄金で被われていた。この祭壇は、ヤキンとボアズの柱の間の階段を上った前室で、神を呼び出すときにだけ適時設け、祭りのあとは破棄したものである（ソロモンの神殿図、エゼキエルの神殿計画図と幕屋の平面図は前掲『聖書大事典』637-8、1111頁を参照した）。

密教では前述したように、修法のあと護摩壇は破壊された。初期のユダヤ教徒と同じように祭壇を破棄することによって壇の中から生命力を引き出したのであろう。打城、破地獄と呼ばれる行事も同じ考え方に立っていた。

真言密教の曼荼羅は、前出『陀羅尼集経』に詳しく述べられている。それによると、土を盛って壇をつくり香泥を塗りその上に曼荼羅を描いたので土曼荼羅という。最初に界線を引き、最後に阿闍梨が尊像を描き込むまで7日かかる。曼荼羅ができるとこの上で灌頂の儀式が行われ、儀式が終わるとその曼荼羅はすぐさま壊してしまうのが通例であった（眞鍋、前掲書、13頁）。壇上の土砂の上に曼荼羅図を描くのが古い形式で、彩色本の巨大な敷曼荼羅を壇上に敷くのは新しい形式であろう。壇上の曼荼羅は神々（仏菩薩）の住む世界で、行者は阿闍梨から灌頂の<sup>こうずい</sup>香水を授かり神々と一体化して神々の霊的な力を身につけ儀式は終了する。壇上の神々は行者の体内に移行してしまうのでもぬけの殻となる。そこで直ちに破壊するのである。あるいは先後が逆になっているが、壇を破壊して神々の靈魂を開放し、行者にその靈魂を移させたのが元の姿であったとも考えられる。

壇は発生的には神を祭る土壇であった。土壇は祭りのあとは破壊されて大地と同じように平坦な状態に戻した。一方、壇は保存されて適事使用された。巨大な壇の場合はその上で儀式が行われた。壇は整備されて巨大な基壇となり、神殿や宮殿が建てられた。祭壇はその上で犠牲獣や食物などの供物を焼いて煙を天に送った。供物を焼くだけではなかった。その上で火を焚いて湯を沸かした。湯は周囲に撒き散らして場を浄化した。祭壇は一方、火炉としてその上で香を焚いた。いずれの場合も、炉あるいはかまどを設けた。炉あ

るいはかまどは、1つの場合もあったが原則的には1対で成り立った。つまり、儀礼を遂行するに際して2つの祭壇を必要とした。正倉院に伝わる奈良時代の香炉の中に2つの自然石の入ったものがある。

密教で、金剛と胎藏の両部曼荼羅図を掲げて諸尊を供養するのは、それぞれの曼荼羅図が祭壇であったことを物語る。図は壁面に懸けて供養する方法もあったし、地面に敷いてその上で供養する方法もあった。金剛は男性を象徴し、胎藏は女性を象徴する。死と生の原理を供養するのは、あらゆる宗教で見られることであるが、密教で特化された儀礼となったのは、中央アジアに仏教が伝来する前にこの地に広まっていたイランのゾロアスター教の影響ではないかと考えられる。ゾロアスターによる宗教改革を経たゾロアスター教は、それ以前のマズダ教とはちがって、善悪2つの原理を共存させるのではなく、2つの原理を峻別し、最終的には善が勝利し、永遠の生命を得るという教義を唱導したが、一般のゾロアスター教やマズダ教では、儀礼においては悪の原理も共存することを必要とした。

古くからイスラエルの神殿には2つの祭壇があった。1つは主の御前にあった青銅(で被覆した)祭壇で、新しい祭壇の北側に据えた(「列王記」下、16.14)。主の御前の祭壇で贖いの儀式を行い、雄牛の血と雄山羊の血を祭壇の4隅の角に塗った。血の1部は、指で7度祭壇に振り撒いた(「レビ記」16.18-9)。ソロモンの神殿では、神殿の奥の内陣に主の契約の箱が安置してあり、その前に純銀で被覆されたレバノン杉でつくった祭壇が安置してあった。前室にある祭壇も黄金で被覆されていた(「列王記」上、6.19-20)。これらの祭壇の上部の4隅に動物の角が付いていた。角は祭壇でもっとも神聖なものとされた。クレタ島に残る先ギリシア文化の聖角も同じものと考えられる。W.R.スミス『セム族の宗教』(後編、永橋卓介訳、岩波文庫、1943年)は、祭壇の角は雄牛のような角のある犠牲動物の頭を供えた名残りで、1頭の場合は2本の角が、2頭の場合は4本の角が壇上に立つことになった。これらの角に供物その他のものを懸けたという(第8講)。

正倉院の中倉に紫檀小架という宝物がある。高さ46.3センチ、笠木の長さ



が36.8センチの鳥居形である。笠木の他に貫も額も付いている。この鳥居形は六角の長方形の台に立つ。2本の柱の高い位置に鉤が2つ付き、反対がわの低い位置に鉤が2つ付く。合計4つの鉤が付くことになる。左右の鉤の間隔は14センチある。私は以前、これは天皇が寝室にこれを置き、夢の中で魂に天地を往来させたものではないかと推測した。高い方の鉤には『弥勒下生経』の経巻を懸け、低い方の鉤には『弥勒上生経』の経巻を懸けた。弥勒はイラン語ミフラク（ミトラク、ミトラ）の写音で、天神の子、救世主、イエスにも通じる神格で、ローマのミトラス教を通じてイランの思想がキリスト教に入った。このたび、ソロモンの神殿の構造から、以下のように推測した。鳥居形の2本の柱は、ヤキンとボアズの柱である。4つの鉤は祭壇の4隅に立つ犠牲獣の角であろう。供犠される前は、犠牲獣は神殿入り口のヤキン、ボアズ柱に繋がれた。両方の柱は青銅製で、高さ9メートル、径1.9メートルあり、中空であった。本来、これらの柱は祖先柱で、一神教以前の慣習では、生と死を象徴する祖先獣を供犠して、神を活性化させるために繋いだのである。柱はまた祖先そのものであり、供犠される犠牲獣と同一のものであった。小架の柱の上下に取り付けた鉤（角）が同一の犠牲獣のものか、別々の犠牲獣のものか、意見が分かれる所である。イスラエルの祭壇上の4隅の角には、供物や祭具を懸けたらしい。祭壇上の4本の角には犠牲獣の血を塗っているの、この角は祭られる者を象徴した神聖な角であったことがわかる。水牛の角を2本取り付けた柱や、水牛を根本に繋いだ柱やその水牛を柱の根本で屠殺する写真が萩原秀三郎『神樹—東アジアの柱立て』（小学館、2001年）に見られる。西アジアにおいても同じような宗教的な慣習があった。

ダビデ王の後継問題で、その一子アドニヤと別の一子ソロモン王の間で争いが生じた。状況はアドニヤに不利になった。アドニヤはソロモン王を恐れ、祭壇の角をつかんだ。その意味は、アドニアは神である聖角にさわり、ソロモン王が剣にかけて自分を殺さないように誓約して欲しい、ということであった。しかし最終的には、アドニアは王位をうかがう者として、ソロモン王によって誅殺された（『列王記』上、1.49-52、2.23-5）。

イスラエルの神殿に安置された2つの祭壇はかなり定形化されているので、原初の姿をうかがうことはむづかしい。いずれにしても1対のものから成り立っていた。ソロモンの神殿内陣に安置された契約の箱の中には、ヤハウェとイスラエルの契約の基礎となった十戒を記した2枚の石板が入っていた。2つの石板の中に生死、善悪というような対立概念を見ることは不可能である。古来、仏教の香炉には自然石2個を入れるが、この2つの石は祭壇の傍らの箱の中に入っている2枚の石板と同じものである。イスラエルの祭壇では犠牲獣が供犠され、その血は祭壇の4隅の角や周辺に塗られ、撒かれた。肉は祭壇に焚かれた火によって焼かれた。犠牲獣は祭られる対象である神の若さを象徴するトーテムと死を象徴するトーテムであった。一神教になる前の信仰ではそうであった。一神教になってからは形骸のみが残った。祭壇上の4隅に安置した4本の角のうち、2本は生を、2本は死を象徴した。犠牲獣が1頭の場合は角は2本である。この場合は、1本の角が生を象徴し、他の1本が死を象徴した。人はこの両角の間を通過することによって若い祖先獣の角から新鮮な生命を受け取り、自身の死せる生命をもう1つの角に移した。

トルコの首都イスタンブールにあるアヤ・ソフィア（神聖なる智）聖堂（現在は博物館）は、6世紀に東ローマ帝国によって東方正教会の聖堂として建立されたが、15世紀末にオスマン・トルコ帝国の手に落ち、新たに聖堂の4隅にイスラム教の尖塔ミナレットが加えられ、20世紀前葉までイスラム教のモスクとして機能した。アヤ・ソフィアという語は近代ギリシア語の発音で、古典ギリシア語ではハギア・ソフィアと発音した。現在もこの聖堂はトルコ語ではなくギリシア語で呼ばれている。イスラム教のモスクの前面に立つ1基あるいは2基の尖塔は、発生的には聖地あるいは墓廟の前面に立つ祖先柱であることは別に述べた。神社や墓廟の入り口に立つ鳥居も同じく祖先柱であり、祭られる神や人の他我である。祖先柱の根本で供犠される獣は祖先の若い他我である。ユダヤ教の伝承を保持したイスラム教は、祭壇上の4隅の角を聖所（モスク）の4隅の祖先柱で表わしたのであろう。キリスト教の聖堂も本来

は集合墓地の上に建てられたので、ギリシア正教でもローマ正教でも礼拝堂の床や中庭には古くからの信徒の墓が保存してある。イスラム教のモスクは本堂の内部には信徒の墓は見られないが、境内には古くからの墓が多く見られる。唯一神を信仰する一神教になってからは、神は生まれることも、衰弱することも、死ぬこともなくなった。しかし異教時代の宗教観念は伝承された。

別の論考で述べたが、日本の出雲神話は『旧約聖書』の「創世記」にあるヨセフ伝説に基づいたヨセフ神話圏の一環を成す。出雲地方には、この地方から始まり各地へ広まったと考えられる四隅突出墳丘がある。その変異形である二突起円丘墓もある。四隅突出墓は方墳の4隅に突出部を設けたものである。発生的には、4つの角を載せたイスラエルの祭壇と同じ精神に立っているのである。四隅の突出部こそ墳丘のもっとも神聖な場所とされ、ここで祭儀が行われた。それぞれの突出部は土盛りか石盛りになっていた可能性がある。柱穴が残っていれば、旗か柱が立っていた名残りである。その変異形である二突起円丘墓の伝統は、前方部と後円部のつなぎ目に2基の造り出しのある前方後円墳の中に見られる。前方後円墳は前方後方墳に次いで出現した古墳である。主体部は後円墳と後方墳にある。前方部は、かつて論じたことがあるが、エジプトのスフィンクスのある下神殿からピラミッドの麓にある上神殿に至るトンネル状の真っ暗な参道に当たる。ピラミッドを築くとき、巨石を積み上げるため、土砂を積んで一時的にスロープをつくった場所である。エジプトではこの巨石運搬用のスロープは、ピラミッド完成後は撤去された。ピラミッドでは、下神殿と上神殿の2か所で祭りが行われた。日本では後円墳についた造り出しで祭儀が行われた形跡がある。この場所が、聖所の前面に立てた2本の柱の基壇に当たった。後方墳と周濠との関係はさらに研究が進めば、いろいろなことが明らかになるであろう。ピラミッド複合もそうであるが、前方後円（後方）墳は人型の形象である。

カフラー王のピラミッドの場合、ナイル川（アスワン・ダムやアスワン・ハイダムのない時代の）を死者を船に乗せて渡り、スフィンクスのある下神

殿でミイラにする処置を施した。王の遺体は500メートルほどの石板で囲われた四角いトンネルを通過して上神殿に着き、儀礼のあとピラミッド内の部屋で別の場所に埋葬されるまで一定の殯<sup>もがり</sup>の期間を過ごした。ピラミッドは人体でいえば頭部にあたり、キリスト教会堂のアプス（アプシス）に当たる。上神殿と下神殿は2つの祭壇を象徴するが、上神殿は教会堂のアプスの前面の台の左右にある半円形のエクセドラに当たり、祭壇と説教壇がその近くにある。2つの半円形のエクセドラは入り口を入った左右にもある。入り口から最奥部のアプスに至る身廊は船（ネイヴ）と呼ばれる。ギリシア・ローマの教会堂はエジプト・イスラエル文化の混合した様式を踏んだと考えられる。奥の2つのエクセドラは左右の肩と腕を表象し、入り口の2つのそれは左右の腰と足を表象する。身廊を船と呼ぶのは、遺体を運ぶ棺や棺架を多くの文化が船と呼ぶことと関係があると思う。

インドネシアのフローレス島に住むリオ族を調査した山口昌男は、リオ族の家屋が船のイメージを宿し、さらにそれに母胎のイメージが重なると見る（『文化人類学への招待』岩波新書、1982年、117頁他）。リオ族の家屋は、母胎から生まれ出て船出し、死んで船で帰還して母胎に帰る場所と認識されている。エジプトのカフラー王の場合は、ナイル川を渡った遺体は下神殿でミイラの処置が施されたあと、500メートルの暗黒のトンネルを通過して上神殿に着く。トンネルは、臨死体験者が体験する死者があの世界で再生するために通過しなければならない産道である。死者のミイラは一定の殯の期間を経たあと、同じトンネルを通過して、あるいはトンネルの外がわを通過して、ナイルの川岸に出て上流にある王家の谷に向かったのであろう。エジプトの博物館には、ピラミッドの麓から出土した巨大な太陽の船が陳列してある。死者はこの船に乗って昼間の天空と夜間の地下の海を旅したのであろうか。エジプトのピラミッド複合とインドネシアのリオ族の家屋は死と再生の同一の原理にのっとって建てられていることがわかる。

前方後方墳は方墳に柄の付いた形である。方墳の4隅が伝統的に聖化されたと思われる。古くから蚊帳の中に棺を安置する風習がある。この場合、三<sup>み</sup>

隅蚊帳すみといって、1隅をはずして吊る。その1隅を通して死者の魂が自由に出入りできるように配慮したとも考えられる。エジプトのピラミッドにある棺室—殯のあとは空墓になっている—には、側壁に径20センチメートルの穴が空いていて、外界と通じている。夜になると遺体から魂の1つかが外界に飛び出し、翌朝戻ってきて遺体に入った。座敷に吊った三隅蚊帳は、四隅を吊った正常な状態の忌むべき形式であるが、座敷と蚊帳と中に死者の入った棺（船と呼ぶ地方が多い）の複合は墓室と槨室と棺の表象である。

九州の珍敷塚古墳の（太陽）船には四角い箱が積んである。この箱の中には死せる太陽の魂が積んであると考えられる。エジプトの壁画では、死者を乗せてナイル川を渡る船は、川の上で死者の口を開く儀式を行うが、船には同じような四角い箱が積んである。蚊帳あるいは四角い箱は木槨で母胎の表象である。1隅を開けるのは死者の再生を意味する。前方後方墳も前方後円墳も濠に囲まれる。遺体は棺に入れられて船で濠を渡る。一般に死者の棺は土葬するとき、その時の地下水位の所まで掘り下げ、棺底が地下水に接するように埋葬した。死者の魂は船に乗ってあの世に向かった。殷の亜字型大墓には地下水面上に遺体が入った棺が安置され、遺体の腰の部分に腰坑と呼ばれる穴が掘られ、その中に犬が葬られた。棺は木製の槨室の中に安置された。槨室は、石槨、木槨の形式で以後の陵墓で継承される。古代の絵画に見られる葬送図で、船に載せられた四角い箱は中に死体が入った棺であると考えられるが、木槨であろう。

ギリシア・ローマの教会堂は、人間の身体に象り、さらには船にたとえられた。それは教会堂の部位の配置や名称から推察することができる。会堂に選ばれた土地は、先住民の宗教上の祭祀の場であり、共同墓地でもあった。先住民の聖地の場合、多くは地下洞に設けられ、地下の水脈が小川のように流れている。古代に限らず、現代の墓や家屋は、船、人体、川、四角い宮室、地下室などの複合体であることがわかる。日本の前方後方墳や前方後円墳は、神社のお祓いの人型、てるてる坊主、手鏡のイメージをもっている。ことに、つくり出しをもったものは、そこが腕の付け根の表象と見られるので、より

人型に近くなる。このような巨大古墳でない方墳や円墳や塚にも前述した要素が析出される。

ヨセフ神活圏に属する出雲大社の系列の諏訪大社は、全国に1万以上の神社を有する神社である。大社の神事のうち、もっとも人口に膾炙しているのは、上社と下社で行われる御柱祭りであろう。上社は本宮と前宮、下社は春宮と秋宮から成る。4宮の周囲にはそれぞれ4本の少しずつ長さの異なった巨大な柱が4本ずつ立つ。神社の周囲に4本の柱を立てる意味は、十分に説明されていない。社前の鳥居のような2本の柱については、朝鮮や東南アジアの文化に同類が見られるので種々の説明が出されてきた。イスラエルのゲゼルとメグドで出土した香壇を見ると、四角い上面の4隅に『旧約聖書』で度々言及される高さ数センチの突起が付いている。これら4つの突起の内がわで香が焚かれたのである。あるいはこの上で供犠が焼かれ、その煙を天に送った。古代の香炉の中に自然石が入ったまま伝えられているが、4つの石が入っている場合もあるのではないかと思う。祭壇の4隅にも同じ突起物があり、角と称される。祭壇はこのように固定する以前から、祭りのときにだけ神が臨在し、祭りが終わると神はそこから去る。したがって、祭壇は破壊され、仮に建てた小屋も撤去されるのが古い形式であった。

教暦新年のティシュリー一月15日から22日まで行われる仮庵の祭りは、日本にも同じものがあつた。鈴木牧之編撰、京山人百樹剛定、岡田武松校訂『北越雲譜』に次のような記述がある。正月15日の齋の神の祭りというのはいわゆる左義長（火祭り、どんど）である。小千谷という所は豊饒な地で、毎年齋の神の祭りを盛大に行う。特定の場所に、雪を踏み固めて径6メートル、高さ2メートルの円い墳をつくり、2か所に階段をつくる。これも雪でつくる。これを城と呼ぶ。壇の中央に杉の生木を立て、正月飾りなど一切をこの柱に結びつけあるいは積み上げ、しめ縄で巻いて蓑のようにし、萱をまじえて円錐形をつくる。頂上には左右に開いた扇をつけて飛鳥の形をつくる。壇上に神酒を供える。このあと円錐形の4隅に火をつけて焚やす。このどんどで各家の門口に立てかけてあつたおんべ（御幣）という幟のようなものを

焼く。このおんべは、数百、数千の白紙と種々の色紙の細い幣束をつくり青竹に吊り下げる。これを焼き捨て、人びとは喜び酒の宴を開く（岩波文庫、1978年、242－3頁、「斎の神の祭」、234－5頁の「斎神祭事之図」）。

この祭事の中に仮庵の祭りと同じ祭事の記憶が濃厚に保持されている。巨大な円い雪の壇は祭壇である。祭壇は本来は2つあったので階段は2つ付いている。祭壇の上では火を焚いた。円錐形は立方体の仮庵に当たる。仮庵は祭りのあと破棄されたが、円錐形は焼却された。火をつける場合、4か所からつけた。イスラエルの祭壇や香炉の上面の4隅に突起があるが、そこが神聖視されたことに通じる。祭壇を城と呼んだが、いくつかの文化でも同じように呼ぶのは前述したとおりである。円錐形はへそ石でもある。その頂上には鳥が止まっている。ギリシアのへそ石オンパロス想起させる。オンパロスの表面には網目文様が彫られ、布、着物と呼ばれる。斎の神の円錐形は萱その他で形をつくり、縄で巻いてある。雪の祭壇の真ん中に立てた杉の生木は祖先柱で、お供えの餅を焼き、一方では神の象徴である正月飾りを焼いた。正月飾りは以前にも述べたことがあるが、エジプト、メソポタミア、イラン、中国にかけて見られる有翼円盤で、あの世から訪れる祖霊の表象である。有翼円盤はある種の古代文化では有翼日輪であると見て、太陽の表象であるという説もある。祖霊は新鮮な魂を運んできてこの世の子孫にそれを移し、古い魂と交換して焼却される。人びとは祖先獣の心臓や内臓や肉や血液をいただき、新しい年を始めた。青竹から何百何千の白や種々の色の紙の幣束を垂らしたものは、ヨーロッパの5月1日に立てた五月柱や伊勢神宮の正殿床下に安置する心の御柱と同じもので、発生的には祖先獣の毛皮を垂らしたものである。アイヌのイナウやわが削り掛けも同じものであるが、別の機会に論じたい。

柳田国男は「神樹篇」（『柳田国男著作集』第11巻、筑摩書房）の中で次のようにいう。正月15日の仮屋は全国に多くの類例がある。地方では鳥小屋ともいい、正月の祭具などを入れて小屋共に焼き棄てる。この小屋は収穫時の番小屋になぞらえたものらしい。小屋を焼くとき、削り掛けの棒を叩いて鳥

追いのことばを囃す。秋田県横手盆地で2月15日（古い小正月）の鎌倉という雪室をつくる火祭りでも鳥追いのことばを囃す。鎌倉は雪城とか竈ともいわれたが、雪城をつくる風習は小千谷あたりにもあった。この小屋の本来の姿は昔の秀倉（又は宝倉）に遡る。ホクラはホコラとなり小祠という漢字を当てようになったが、実像は移動可能な神の座所で、神輿に近いものだったらしい（13-5頁）。

柳田の文の中にある正月15日の鳥小屋が『旧約聖書』の契約の箱と同じもので、鳥は箱の上のケルビムを想起させるものであることがわかる。鳥小屋は他方では仮庵であり、祭りのあとは焼却された。鳥小屋を焼くとき、『北越雪譜』の斎の神事事で、多色の御幣がぶら下った青竹の幟のようなものを焼いたが、その原初的な形である削り掛けを叩くことを述べている。最近、震度6強の地震に見舞われた小千谷にも、このような雪城があった。小正月に小千谷市で雪城をつくり、中にロウソクを灯した映像が放映されていた。秋田の鎌倉は、雪城と呼ばれる他に竈と呼ばれたが、小供がままごとをするのでこう呼ばれたのではない。雪城が祭壇で、そこでは火祭りが行われたからである。このような小屋はホクラと呼んだが、それは宝庫とも神庫とも書かれた。これらの小屋は、一段高くなった場所に建てられた。秀の字を当てたのはそのためである。ホクラがホコラに転じた。ホクラ／ホコラはイスラエルの契約の箱と同じような移動可能な小祠で、神輿に近いものだった。ロンドン時代の南方熊楠とF・T・エルワージーのやり取りは前述した。南方から柳田への書簡は明治45年（1912）である。「神樹篇」のこの項は大正4年（1915）に発表されているので、柳田は南方書簡を思い出していただろうか。しかし、契約の箱やエルワージーのことについては言及はない。柳田が出した資料は比較文化学の観点からすると価値の高いものである。柳田は無意識に博搜して多くの事例を挙げた。世上、柳田は欧州の学説と方法に精通していたが、論を進めるに当っては引用する事例は全て日本のものであった。一方、南方は、長期にわたる海外生活と、多くの外国語の知識にも拘らず、文化誌の記述に際しては、欧州の方法に拠らず、東洋的な分類法に拠ったと



いわれる。2人の巨人の学風のちがいによるものである。

東海の駿・遠・信地方にまたがる遠山地方一帯は、遠山祭り、花祭り、おこない田楽などを伝承する地として有名であるが、富田鉄之助は「歌舞芸能者の装い」（『is』20号、ポーラ文化研究所、1983年）の中で遠山霜月祭りについて論じている。遠山は長野県下伊那郡にあるので、現在では県の南にある飯田から入ってゆくのが普通である。柳田国男は飯田の旧家に入籍したので、この地域を調べ上げ、遠山の名称の起源を論じている。柳田は「東国古道記」（『柳田国男著作集』第2巻、筑摩書房）にいう。遠山は天竜川左岸に位置す溪谷で、信州遠山という山奥ではあるが中世以来の大通りの1つであった。どのような人が、かかる山間の大道を利用していただろうか。この道は北の諏訪大社に奉仕する人が利用した道で、北から入ってきた人にとっては、ここが唯一の遠山であった。ここを遠山と命名したのは彼らに他ならなかった。諏訪社の鹿の頭の供犠や耳裂鹿<sup>みみさけ</sup>の伝承もこの山地に属し、もっとも周縁部にあるこの地の住民も恭敬の誠を致していたと思われる（244-8頁）。遠山地方は出雲神話圏の移転地の中心である諏訪大社の影響下にあったことを強調したために、柳田の記述を援用した。諏訪大社は出雲神話圏の中にあるが、出雲神話圏は比較文化史の観点からすると、ヨセフ神話圏に属するものであった。

遠山で行われる霜月祭りは、旧暦11月の祭りで、現在は12月上旬に行われる冬至前の生命更新の祭りである。祭りは神殿と斎場（舞処）とを1つ棟に収めた鞘堂内に、1基または2基の五徳よりの土竈に遠山川の清水を満たした大釜を掛け、湯立てする。村人が禰宜になり、神名帳を読み上げて国中の神々を招聘する。村人は湯がたぎる大釜の周りを踊り舞う。禰宜は笹の枝を束ねたものを湯に浸し、それを振って周囲の人びとに熱湯を振り注ぐ。祭りは男性のみで行われるが、女装した男性が加わり、赤ん坊の姿をした人形を抱いて踊る。赤ん坊を抱いた男は2人いる。女人禁制の意味もあるかも知れないが、境界の祭祀空間ではあべこべの世界が出現する。2人の赤ん坊は、死と生を象徴する。見物人の間から悪態が浴びせられ、暴力的な所作もある。

最後に山の聖霊たちも舞処へ踊り出てくる。湯気と火の熱気で揺れ動く紙飾りを神主が斬り落とし、長老が火気の衰えた竈を鍬でつき崩して祭りは終わる（前掲『is』34-5頁）。

霜月祭りは覆い屋である鞘堂の中に神殿と斎場を設けて行われる。イスラエルの幕屋と同じ形式をとる。諏訪信仰圏の記憶が保持されているのである。出雲大社の本殿は、右半分にある入り口から入ると間仕切りの壁があり、その奥に御内殿がある。宮司は左に折れ、さらに右に折れ、最後に右に折れて御内殿を拝する。つまり本殿内部は2つに分かれている。

霜月祭りの神殿はイスラエルの幕屋の契約の箱を安置した部屋と香壇と聖所に対応し、湯釜を焚く竈と舞処のある斎場は幕屋の前室に当たる。火炉は2基築くのが伝統である。1つは死を、1つは生を象徴する。家庭で築いた竈も、1対の炉であるのが伝統である。1つが飯用、他がおかず用というものではない。幕屋の前室の祭壇は1つであるが、聖所の祭壇と対になっていた。イスラエルの宗教では、至高神の祭りで99の神の属性を念じ、あるいは読み上げた。多神教では、祭られる神の属性は八百万神に分散しているので全国の神々を招集しなければならない。冬至に赤ん坊が誕生する祭りは、40週280日前の春分における聖婚を前提とする。立春正月の文化では立冬を迎える祭りを行うことになる。恐らく霜月祭りと赤子の誕生は西アジアの文化の名残りであろう。

霜月祭りでは、大釜は火炉の上面の突起の上に置かれる。4つの突起が古い型であるが、数は増減するかも知れない。イスラエルの祭壇の4隅の突起と同じものである。供犠された獣の皮や内臓は祭壇上で焼かれ、煙は天上に送られる。肉類や骨は祭壇上の大釜の中で煮られ、祭りの参加者にふるまわれた。肉の調理は必ずしも焼き肉とは限らなかった。日本の湯立て神事は占いや予言あるいは浄化のために行ったが、西アジアでは大釜での肉の調理は神人共食のためのものであった。調理は室の中央以外、室の入り口あるいは天幕からある程度離れた場所で行い、でき上がった食品を天幕の中に運び、共食することもあった。この場合は、焼き木の香り、料理の匂い、湯気の中に

潰れることはできなかった。霜月祭りでは、紙飾りが供物の象徴で、これを火にくべることにより、燔祭の名残りとした。火力が衰えた竈は生命力を失った祖先の象徴で、エネルギーは全部放出して神や祭りの参加者に与えてしまった。新しい神の血肉である酒や餅はみなで共食し終わった。新しいエネルギーを持った神が依ってくる祭壇、火壇は魂の抜けたもぬけの殻になってしまった。村人の中の長老は、エネルギーを受け取った者の代表として抜け殻となった祭壇を破壊する。他のいくつかの文化では、城と呼ばれる祭壇を壊すことによって、中から新しい力を引き出す。

前掲『is』20号で、三隅治雄が遠山の霜月祭りの神楽は伊勢神宮の内外で行われた湯立神楽の系統を引くもので、恐らく伊勢方面から伝来した神楽に、後から遠山氏の怨霊をしずめる儀式を加えたものとするのに対し、富田は、こうした中央の神事が遠山に土着する遙か以前、いうなれば獵師や木地師などの半定着あるいは非定着的生活者たちがこの地に群れをなしていたころの生活感情が、この祭りに今なお色濃く残影している気がしてならない、といっている（前掲書、35頁）。

伊勢神宮はヤコブ神話圏に属する。ヨセフ神話圏に属する諏訪大社の正月1日の儀式に蛙狩かわずかり之神事の しんじがある。伊勢神宮の場合、二見浦に夫婦岩めおといわを望む道の傍らにある岩場に、焼き物の小型の蛙形がいくつか供えてある。人びとは伊勢神宮ではなく、夫婦岩に供えている。類似した神話圏内のどちらの影響の下に遠山霜月祭りが成立していったのか、さらに考究する必要がある。出雲の信仰圏下の神事であるにしても、大和の信仰圏下の神事であるにしても、遠山の霜月祭り神楽には西アジアの移動民の聖所建設と礼拝の方法が記憶として濃厚に残っていることを析出した。

## The Origins of Altar and Tabernacle of Japan

Eiichi IMOTO

In the 7th century Persian refugees came to Japan several times. They were invited to the royal Urabon ceremony, an ancestor-worshipping Buddhist ceremony of Persian origin.

In the Urabon ceremony an altar or a pair of altars were constructed in the outdoor or in a temporary shrine. When the ceremony finished these altars were destructed like those of ancient Hebrews.

The temporary shrine of Japan resembles the tabernacle of Hebrews, A portable shrine of Japan, which the god gets into and travels around his territory resembles the Ark of Covenant with two slates inside.

People came to Japan from China, Korea, and Central or Southern Asia across the sea and introduced many cultures into her.